

春を呼ぶ国づくり

国づくりは、政治家の器に拠る。戦国武将においても然り、その智慧は今も生きている。また、大震災を好機と見て、かねてから抱いていた都市政策を貫いた男があった。そして今日、安定した社会保障を時代に沿った制度にしようとする政治家がいる。そんな精緻な政策と政治家の熱情、度量があつてこそ、現代の国づくりに春を呼ぶ。

新春対談

日本らしさを活かし、

夢ある未来を

新春のやわらかな陽射しを浴びる党本部総務会長室に、着物姿もあてやかな猪口邦子衆議院議員が訪れた。聞き上手な丹羽雄哉衆議院議員に誘われて二人の会話は正月の思い出話に始まり、少子化、社会保障制度などに及んだ。更に若い頃の自らの体験談を交え、二人の語らいは日本人らしい夢ある未来へと広がってゆく。

◎出席者

党総務会長・元厚生大臣
前党社会保障制度調査会長
衆議院議員

丹羽雄哉

前少子化・男女共同参画担当大臣
ジュネーブ軍縮国際会議日本政府
代表部大使
衆議院議員

猪口邦子

思い出の正月

猪口邦子 幼い頃のお正月、思い出すところが多い

と思いますが、先生にとってのお正月の思い出と言え
ば？

丹羽雄哉 私の場合は正月というと、その前日の大



「国民が将来に安心感を持てる政策を打ち出していくことが大切」と語り合う

晦日に思い出があるんです。と言うのは、母が夜中までかけておせち料理をつくるんですが、それに、ちょっとした楽しさがありましたから。

猪口 　　なんでしょ。

丹羽 　　私は子供の頃から、寒天が好きでね。

猪口 　　健康にもよろしいですよ。

丹羽 　　寒天を切ります。寒天の本体というか、これはお正月用のおせち料理の重箱に入れる。で、切り端が残る。僕は側で見てて、この切れ端をよく食べたことを、まず思い出しますね。

猪口 　　うわーッ、素晴らしい思い出。先生は、茨城県のご出身でいらっしゃるんですね。

丹羽 　　そう、私は茨城県の霞が浦沿岸、玉里村という小さな村から、幼少期に疎開を経て、東京の目黒川のほとりに引っ越して参りました。すぐそばに荏原神社があって、そこに家族とお正月になるとお参りに行っていましたね。

その荏原神社のすぐそばに、歌手の鳥倉千代子さんの実家があった。彼女の実家は貸し自転車屋さん。貸し自転車ってご存じないでしょう。

猪口 　　いやー、ちょっと……。

丹羽 　　要するに、あの当時は自転車を持ってないもの

ですから、借りるわけですよ。

猪口 島倉さんの歌声は、その頃からお聞きになっていらっしやっただけですか。

丹羽 荏原神社の境内や聖蹟公園で、確か美空ひばりの歌を唄っているのを聞いたことがありますよ。近所の評判が非常にいい方で、『この世の花』でデビューしたときには、子供心に大きな衝撃を受けました。後は、あの頃は空き地が多かったから、風揚げをやったというのを思い出しますね。

猪口 私のお正月は、母がおせち料理を作るのを、私を手伝うところから始めていくんです。母の作るお雑煮がとても大好きで、ずっとそういうものだと思っていたんですが、嫁いでお雑煮の作り方もいろいろあるんだということを知りました。嫁ぎ先のお雑煮もとても美味しい。それで、何となく我が家では両方作るようになりました。

おせち料理の準備というのは、素材の良さ、段取り、手順の良さが必要で、リズミカルに作っていかなければならぬ。本当は知的な、勝負の料理だと思っています。

丹羽 何を入れるんですか、お雑煮の中には。

猪口 私の実家では、鶏肉の出汁を中心に色々なお

野菜を入れ、最後に三つ葉を飾る比較的あっさりした味付けです。

丹羽 ご主人の出身はどちらなんですか。

猪口 嫁ぎ先は新潟です。新潟では一般のおせち料理の他に、『のっぺい』という料理があって、細かい材料をたくさん取り揃えて作ります。手間はかかるんですが、昔からの知恵で、冷たくなってもとても美味しいものなんです。そういうのを作って、必ず着物でお正月は過ごしました。

丹羽 着物はいいですよ。私も大好きですよ。それじゃあ、嫁がれる前から、着物はお召しになっていた？

猪口 はい、嫁ぐ前はお正月にきれいな着物を、母が着せてくれました。

結婚してからは、お正月という地域の方々がたくさん集まりますので、私は長男の嫁として着物に割烹着を着けて動いていることが多かったですね。

丹羽 それは偉いですね。今では想像が付きませんか。

猪口 いえいえ、もうごく普通の日本のお正月。

丹羽 最近では、お正月でもあまり着物姿を見かけなくなりましたが、普段でもお召しになることはあるん



丹羽雄哉氏

ですか。

猪口 私は大学で講義やゼミをやっていた時から、国際政治、グローバルイゼーションを着物で論じるということをよくやっておりました。さすがに議員になってからは、ちょっと躊躇があるんですけども。

丹羽 大学で着物姿で講義する。猪口先生の授業は、さぞかし人気があったでしょう。

猪口 ええ。ゼミはよく着物で論じておりました。

丹羽 そのお写真があったら、一度見せていただきたいですね。

猪口 じゃあ今度、学生と撮ったのもたくさんございますのでお持ちします。

丹羽 学生さん達も、喜んでいたんじゃないかな、親しみを感じて。

猪口 ホッとするみたいでした。

授業の内容は、グローバル化の競争の中でどうするかというような今日的なテーマ。そういう時こそ、自分たちを構成している日本人としての要素について自信を持った方がいいと思って。第一、非常に合理的なんですね。着物を着ていると、まず風邪を引かないんですよ。

丹羽 日本の伝統文化は、それなりに知恵が詰まっていますからね。

猪口 そうなんです。着物は襟や胸元を合わせますので、気管支など非常に暖かいですね。風邪は、そういうところから引くわけですから。

やはり文化や先祖の知恵には非常に卓越したものがあつた。だからこそ、長年に亘って用いられてきたんでしょうね。

尽くせない感謝の念

猪口 今日はいいい機会なので、私、総務会長に心からお礼を申し上げたいことがたくさんあるんです。

丹羽 そんなに改まって、なんででしょう。

猪口 以前から、よく重要なテーマについては、政府・与党が一丸となって会議を立ち上げている、というのを新聞で読んでおりました、私、少子化担当大臣を拝命した時にそのことを思い出しました。

それで、少子化対策も抜本的な強化策を政府だけでというのではなくて、政府・与党で会議を、とお願いしたんですね。

特に新たな財源を伴うことは、与党全体で合意して内閣で決めてこそ実行性を確保できますから。それは議院内閣制であつたら当然の考え方です。不慣れな大臣ながら、早い時期にそう考えて……。

丹羽 三月頃でしたかね、会議を立ち上げたのは。

猪口 協力して立ち上げていただきましたので、それは有り難かったです。

ところがそこで、どんなことになるか、もう不安で不安で仕方がなかったんですよ。

丹羽 とても、そんな風には見えなかった。堂々としていましたよ。

猪口 先生は厚生大臣として、本当に大きな実績をたくさん積んで来られて、官僚達が丹羽先生をとてども尊敬している。また他の議員の方達もそうですから、政府・与党の会議の時、丹羽先生が私の前に座ってくださって、大変心強かったです。

いろんな意見が出て、どうなるかと不安でいっぱいだったんだけど、先生が「きっと何とか、ちゃんとまとまるから大丈夫だよ」と、おっしゃってください……。

丹羽 緊張しますよね。政府・与党の政策を決める大切な会議なんだから。

猪口 で、最後に発言してくださいました。最後の先生のまとめ方で、みんなが「そうだな」と納得されて、それ以上の意見が出なかった。先生が最後に発言してくださいまして、非常に美的な、ある種の論議の美学のようなものがあつたと思って、もうとても感動して、しばしそこに立ち尽くしたという記憶がございます。

少子化の動向

丹羽 少子化の話に入ったようですから、まず先に出生率に着目して、話をさせていただきます。私は昭和十九年生まれなんです。出生率の数字があるのは昭和二十二年からで、このときの出生率が四・五四なんです。

猪口 そうです。

丹羽 私も四人兄弟でして、昔は四人、五人の兄弟がみんな、八畳か六畳ぐらいのところには雑魚寝同然で寝ていた。けれども、それがそれほど苦痛でもなかったんですが、今はご存じのように一・二六。

猪口 二〇〇五年のが一・二六で……。

丹羽 どんどん下がっている。私は、社会保障とこれまで取り組んで参りまして、やはり自立と連帯、つまりお互い支え合いの精神が必要だと痛感しています。要するに、社会保障というのは次々と次の世代が支えていくということなんです。今、一人のお年寄りを三・二人の現役が支えている。これが二十年後には、一人のお年寄りを一・九人で支えなければならぬ。こういう問題もあって、実は少子化問題というのは日本国にとって大変大きな問題なんです。

私の記憶するところだと、先生が初めての少子化専任大臣だと思うんですね。

猪口 そうなんです。

丹羽 今までは、この問題について何となく、私も政治家として真っ正面から取り組んでこなかった。

猪口 いえ、そういうことはないですけど。

丹羽 これは正直申し上げて難しい。要するに、子供さんを産むとか産まないというのは、人生観、あるいは個人の価値観の問題でありますから、この問題を避けてきた部分もあった。

猪口 次世代については、経済的な違いで子供が産めるか産めないか、あるいは進学させることができるかできないかなどと悩む必要がないように、ある意味でその可能性について平等にしていくというところに、社会政策の深い思いはあると思うんです。

丹羽 それを大変エネルギーに全国を回って、とにかくこの問題の重要性ということで、少子化問題というのを俎上（ソノカミ）にあげたのは先生の功績だと、感心しております。

猪口 いえいえ、とんでもございません。何度も大変な局面がありました時に、「じゃ、丹羽先生に相談しようかしら」と呟くと、皆さんが「いやいや、それ



猪口邦子氏

いても、現実問題として職場の問題、家庭の問題など、さまざまな形でまだまだ根づかない部分がある。そういう問題で、やはり一番大きな問題は育児と仕事をいかにして両立させていくかということが、大変重要だと思っんです。

猪口 子供の年齢の進行とともに家庭のニーズは変わっていきますから、それぞれの子供の年齢に即した政府の支援を全般的に拡充していかなければならないですね。

丹羽 先生が大臣の時におっしゃっていた、男性の働き方、これも非常に大きな問題なんですよね。残業、残業で、毎日、夜中に帰って来て朝早く会社に行くということでは、家庭の絆の中でお互いに一緒に子供を育てていこうという機運が、ちょっと乏しくなるんじゃないか。これも実は少子化に結びついているんじゃないかなあと、こういう風に私は考えていますけどね。

はちゃんと検討しましょう」という感じで、ほんとに先生の重さをひしひしと実感して、有り難かったです。

丹羽 いやいや、そんなことはない。ご経験なさったと思いますが、一言でいうと、日本という国はまだまだ男性社会なんです。これが先生、ジェンダーの問題だとか、いろいろな問題に取り組んでいらっしゃるんですが、男女均等というのは、実際、口では言って

猪口 私はこの分野を勉強すればするほど実感した

んですね。社会政策というのは民主主義の本質にかかわるテーマだと。

丹羽 我が国の社会保障というのは、皆年金、皆保険。先生もアメリカ暮らしが長かったから、お分かりだろうと思うんですが、アメリカで交通事故に遭ったら、大変ですよ。このあいだもテレビを見ていたら、或るご婦人の娘さんがアメリカで交通事故に遭って救急車を呼んだ。しかし、まず聞かれたのは、どこの保険に入っているか。要するに、それによって連れていくところが違うという。

率直に申し上げてアメリカでは、六十五歳以上の高齢者と一定の障害者が加入できる連邦政府が運営しているメディケアと、州単位が実施している低所得者を対象にしたメディケイド(生活保護)という分野しか公的保険がない。

猪口 そうなんです。

丹羽 しかも、医薬品の給付はPBMという民間の組織、保険代理店が政府に代わり管理している。ところが実際問題、いろいろお聞きしてみますと、それこそお正月のデパートで売り出される福袋みたいなもので、その中にとのような医薬品が入っているかわからない。だから、例えば自分が胃潰瘍になったというと

きに、その薬が入っているかどうかもわからないという。実際問題として、メディケイドには薬も給付されることになっているが、公的な保障になっているかどうか実ははっきりしない。

そういう意味で、いろいろなご不安はあると思いますが、日本の場合には安心して医療機関にかかることができる。大変誇るべきことです。私がいつも挙げているのは、日本が今、世界の中で、平均寿命が一番長いということ。

猪口 男女ともに長い。

丹羽 二〇〇五年の統計で女性が八十五・四九歳、男性が七十八・五三歳まで平均寿命が延びてきているということは、一つはこういった、いわゆる社会保険制度というものが非常に充実しているということ。

猪口 そうですね。

丹羽 もう一つは、先生の分野でもありますが、戦後、日本の国というのが大変豊かになってきた。GD Pもアメリカに次いで第二位である。この二つが、大変大きな原因ではないかなと思っておりますがね。

日本初、専任の少子化相

猪口 平和で豊か。それでも、日本の社会は年功

序列の構造がそこにある。他方で同時に、グローバル化の大きな試練を国全体で受けている。結局、若い層は仕事も大変過ぎる中で、結婚して子供を育てて家族をつくるということと同時に考えなきゃならない世代ですから、そこに大変さが集約されてしまうのではないかとというのが心配です。

ですから、経済的支援も含めて、若い世代がカッコよく肩で風切りながら生きていけると見える程には、楽ではない我が国の現状を、一人でも多くの先輩の先生方に理解していただいて、働き方の改革、経済支援の拡充、多様な子育て支援策の推進を行って欲しいと思っています。

丹羽 色々な角度から改革していく必要が迫られていますよね。

猪口 初の専任の少子化大臣となった時、いったいどうすれば流れを変えられることができるのか、一つ挙げるとしたらどれかと、よく聞かれたんですね。

丹羽 そんな簡単なことじゃないな……。

猪口 そうなんです。この質問は、極めて経済政策的な発想だと思えます。経済政策だと、方程式を解くことができ、その答えというものがあるのかもしれない。

ですけど、社会政策の分野では、家族の困り方というのは非常にさまざまです。高齢者の介護をしている家庭であれば、隣のうちと自分のうちが同じことで困っているわけでは決してなくて、いろんな細かい違いにあった制度が必要なのが分かるわけですね。子育て家庭の場合もそうなのです。

丹羽 今、よく言われていますよね、選択できる社会が望ましいと。

猪口 子育て家庭も実はそうで、あるところでは費用に困っている。あるところでは保育園に入らず、サービスの面で困っている。あるところでは育児休業が制度としてはあるが、取りにくい職場環境があるとか、あるところでは、自分は専業主婦で、ご主人は朝七時に出て夜十一時に帰ってくる、まさにセブナイレブみたいな生活で、長時間労働で困っているとか、みんなそれぞれなんです。

だから、たくさんの方の政策を総合的に体系的に推進しなければならぬ。これだけ重点化すればという一点豪華主義的な発想から、社会政策の場合は脱却して、多様性を認めた政策を取らないと、ということを感じました。

それに内政の実施は各自治体である場合が多いです

から、社会政策の分野の政策形成については、自治体のトップと担当大臣とは対等な関係で対話をする必要がある。国が自治体の意見を聞き、国からのお願事項も反映させたい。もっと少子化対策に本腰を入れて欲しい、予算はどのくらいか、その分野での職員の確保はどうか。地元の経済界との少子化対策強化の対話は進んでいるのか等々。いろいろな要望が互いにあるからこそ、自治体と担当大臣との政策対話プロセスというものを重視することにしました。それはとても効果があったと思うんですね。

景気回復で得た果実を

丹羽 今、景気も回復基調にありますし、いざなぎ景気を超えるということ、今年も更に息の長い景気回復を願っているんですけども、いざなぎ景気というのはちょうど四十年前なんです。そうすると、私の学生時代の頃ですね。

猪口 まさに。

丹羽 その頃は、「3C」というカラーテレビ、クーラー、そして自動車の、この三つが高嶺の花であって、これを庶民の皆さん方が手に入れたということ、憧れであった。私のうちにテレビが入ったのは、

もうちょっと前、小学校の後半の頃、うちに帰ったらテレビが置いてあるんですね、十四インチの白黒テレビですけど。そのうちに、何か知らないけど夜になると人が集まってくるようになって、みんなで電気を消してテレビを見ていた。

猪口 映画館みたいに。

丹羽 そういう時代から、どんどん、いわゆる高度経済成長になっていった。今、そのいざなぎ景気を超えるということなんですが、今の経済成長は実質二・四％です。あの当時は一一％を超えていましたので中身は違うんですけども、国民の皆さん方の中に実感として、何となく景気の回復感がないということをおっしゃる方がいらっしゃる。

猪口 経済の回復期においてはいろいろな機会が開かれます。ですから個人が、自分の生活の中において、もう一歩努力してみるということを試みて欲しいと思うんですね。全体がマクロで縮小している時には、努力しても上手くいかないということがあるかもしれないけれども、今はチャンスだと思えます。

丹羽 ところが、私ども政治家にとって一番大きな問題は、景気がよくなれば果実が生まれてくるんですけども、それを享受する人とそうでない人が生じて



▲福祉施設をたずねる丹羽雄哉氏と小淵恵三氏(右)
▶慶應義塾大学の仲間たちと
(前列左から3番目)



ね。景気が回復して得たその果実、構造改革の配当を社会政策の拡充の分野において受け止めたい。

丹羽 ですから、所得のある人がますます所得が増えて、低所得の人はだんだん、何となく社会にぶら下がるといふことじゃなくて、やはり国民の皆さん方が将来に安心感を持てるような政策を打ち出していくことが、私ども自由民主党の国会議員の大変大きな役目

いるということなんです。いわゆる格差の問題がある。特に大都市圏と地方都市の問題、大企業と中小・零細企業の問題、もう一つは正規社員と非正規社員の問題。安倍総裁も、特に非正規であるパート、フリーター、こういった方々に対して、年金で将来の保障をきちんとしなきゃならんと、いわゆる再チャレンジ支援策に大変力を入れていらっしゃいます。

猪口 まさにおっしゃる通りです。今、景気が回復して構造改革の成果が出ている。その段階で何をやるかはとても重要なことです

というか、これからの課題ではないかなと思っ
ています。

猪口 それを若い世代で受け止める施策のひとつが、少子化対策ではないかと思うんです。ですからこの際、企業にもご協力いただき、ぜひこの分野の拡充をお願いして、それによって若い世代が政府・自民党の考え方の中に、自分達の世代への軸足もしっかりあるんだということを実感できる社会を築いていかなきゃいけませんね。

丹羽 今、社会保障は、まさに若年世代の負担の軽減にいかに取り組んでいくかが課題なんだと、このことを私、ずっと申し上げて来ているんです。先生を前に恐縮ですけども、これまではお年寄りはいコール社会的弱者である、社会的弱者イコール経済的弱者という図式が成り立っていた。例えば医療費の負担も若年世代に比べて軽減されて来たんですね。ところが、先程申し上げましたように、支える人がだんだん少なくなってきた、支えられる人が多くなってきた。猪口 社会福祉政策は、今まで高齢者にかなり手厚く出来ていましたからね。

丹羽 実はお年寄りの場合は、いま二極化に進んで行っている。おカネのある人はものすごくおカネがあ

る。その反面、本当に年金で暮らしていらっしゃる方もある。そこが非常に難しいところなんですけれども、私はおカネのあるお年寄りの皆さん方、例えば会社を経営しているような方だとか、社長、会長という立場にある方は、みんな理解してくれそうです。医療なんかの場合はよく誤解されるんですけども、若年世代の方々の保険料によってお年寄りの皆さん方の医療費が賄われている、その負担を少し軽減していいんじゃないか。その一方で、おカネのある方々は、ちょっと専門的で恐縮なんですけど、夫婦で五百二十万円以上の収入のある方々については、三割負担をお願いできませんかということなんです。若い方々も、もっと所得の少ない方が現役だということ、三割負担しているんですから。

猪口 おっしゃる通りです。

丹羽 ところが、これを総論で申し上げると、非常に理解されるんですが、各論になるとなかなか難しい。社会保障に限らず何でもそうです。総論では、例えば構造改革だ、これから乗り切っていくにはこういうことをしなくちゃいけないんだ、思い切ったこれまでの既得権益にすがってはいけませんんだとか、改革をしなくちゃいけないんだということは理解してくださる

んですけれども、各論になりますとなかなか難しい。

そこを私も政治家は、国民に対していかに粘り強く説得していくかということが大事であって……。

猪口 少子化対策も、子育て支援を強化すべき、若い世代をしっかりと見ていかなきゃならない、これはみんな総論賛成ですね。しかし、乳幼児加算のような新たな財源を必要とする場合においては、具体的にしなければならぬほど、それは苦しい丘を上がらなければならぬ。社会保障の分野というのはそういう問題が常にあると思います。重要なテーマというのは、横断的に調整しなければなりませんから、多方面に調整力を発揮しなければならぬ。

それを先生は、常に果たして来られましたか、どうやったらそういう技量というのは磨けるんですかね。先生から政治家としての仕事ぶりだけでなく、そういった本質的な資質を学んでいきたいと思っております。

未来を見据えて

丹羽 私は有権者、国民の意識というのは、昔に比べると、今、非常に変わって来ているなと思いますね。私も先生より、いささか長く国会議員をやらせていただいていますけども……。

猪口 ええ、もう素晴らしく。

丹羽 昔はとにかくニコニコして頭を下げて握手をすれば、有権者の支持がいただけた。私はあんまりニコニコしてなかったんですけれど(笑)。

ところが、今はもうそうじゃなくて、自分達の町を、自分達の国を、どういうような考え方で引っ張っていくんだということを、きちんと説明しなければならぬ、こういう風になってきましたね。

猪口 有権者の意識は時代によって変わりますから、敏感に反応しなければいけないわけですね。

丹羽 それで私、選挙を通じて感じたんですけれども、昔は集まっていただけのお話をする。ところが今は、忙しいし、なかなか集まってはくたさらないですから、なるべく街頭で、たとえ人が十人でも二十人でも自分の考え方を有権者に訴えるようにしました。

猪口 先生でも街頭演説をされるんですか。

丹羽 そういう姿勢は有権者のみなさんが、ちゃんと見てくれるんですね。それを着実に実行することで、やっぱり有権者から支持される。

演説するときにも、利益誘導とは言いませんが、そんなようなことばかりを言っていますと、あの政治家は相変わらず古いタイプの政治家だという風に国民に

伝わってしまふ。そこをどういう風に、さっき申し上げたような総論の部分と各論の部分と、上手く接点を持ちながら説明していくかということが、私共のこれからの大変大きな問題かなと思っています。

猪口 勇気を持たなければいけませんね。

丹羽 ええ。私なんかは、これまで若い方々の負担をできるだけ軽くして、所得のあるお年寄りの方々に協力してもらう時代になったと、常言つねごと言って来ました。それを敬老会で話すときもあるんです。そんな時は、身近な話で説明するようにしているんですが、それは、昔は敬老会で例えば七十歳以上の長寿の方に対しては金一封とか、そういうものを差し上げていたけれど、今は、それもなくなって、気持ちを差し上げるという時代になってしまった。そして、景気も低迷している時代が続いて、現実的にお年寄りの皆さん方は自分達のお孫さんにお小遣いをあげたいけれどもあげる余裕がないという方が増えてしまった。しかし、お小遣いはあげなくてもいいから、その分、借金を残さないようにしましょうと、私はこう言うんです。

そうすると、最初は変なこと言うんだな、情も何もない人かなと思われていたんですが、それがだんだん、丁寧に説明していくと理解が得られるようになってく

るんですね。

猪口 具体的なお話もされるんですか。

丹羽 ええ、年金にしても国の負担の分が今は三分の一だけでも、これがやがて二〇〇九年には二分の一にするということとで国の負担が増える。それにも増して若年世代が減ってきている、そういうことを説明しておりますので、有権者の方々もだんだん解ってきました。その辺のところを、これから本音で、国民の皆さん方に訴えていくということが必要ですね。

猪口 丁寧に説明して、具体的にいま数字を出されたように、説明していくということですね。

丹羽 はい。真実を包み隠さず話すことが大切だと思います。

猪口 よく地方に行った時に、昔は三世代同居が多かったから子育てにはいろいろ手があったけれど、最近はなかなかそうもいかない時代になってしまったと多くの方がおっしゃっているんですが、私は、地域全体で三世代同居と考えるもらえないかと訴えるんです。自分の直接の子供、孫じゃなくても、六十二億も世界にいる人口の中で、同じところで生まれ育つ子供達は何かご縁ですから、みんなサポートしてあげてくださいと。今の先生の話の話を伺っていると、国全体で三世

代同居なんですよ。

丹羽 それと、これから続く未来の子供達のこと、きちっと考えておかなきゃいけない。

猪口 お互いに支え合いの構造をきちっとつくっていかねければなりません。若い人が子供を産みたくても、先のことを心配せざるを得ないという構図ができ、先のこと、国全体としてのあり方が心もとないことにもなる。どこかで持続可能性がないシステムになっってしまう。

丹羽 よく若い方々が、将来に対する夢であるとか、希望とかがだんだん持ちにくくなってきていると言われますよね。これも今、先生が熱心に取り組んでいらっしゃる一つの少子化の問題と関係があるんじゃないかと、こういう指摘をする方もいらっしゃいます。

猪口 です。今ここで、若い世代にもう少し軸足を置いた予算の配分、給付の拡大をやれば、若い人たちが励まされると思うんですよ。今日はお時間ないでしょうけれども、私も幾つか資料を持って来たんです。私、とっても嬉しく思うことがあるんです。それは最近、結婚する数がワッと増えていること。それと共に、出生数が累積では平成十七年より十八年の方がずっと増えている。これはまだ、十九年度の予算で新しい少

子化対策が実行されるはるか前の段階なんです。私が担当大臣の時、少子化対策を強化して、たとえ今いろいろ不安があっても、この国で必ず大丈夫な状態をつくっていくよう政策的な努力をするからと強く訴えていた、それに対して、これだけ反応があるということは、なかなか……もちろんそれだけじゃないですよ。景気が回復したとか、いろんな要素があると思いますけれども、若い世代がちょっと励まされたのではないかなと思うんです。

丹羽 国民は敏感ですよ。こうやってきちんと数字の上でも明確に表れてくるなんて、嬉しい兆候ですね。

猪口 今、若い世代の問題が政策の前面に出てくるようになって、新聞でも子育て支援が重要というような話が出ている。それに、いったん家庭に入った多くの女性達が、子育てが一段落した時に、また社会に再統合されたいという思いがある……先程、再チャレンジ支援の話が出ましたが、そういうことがかなり主流化された形で取り扱われるということに励まされている。この勢いは何としても持続させなければならぬ。女性、子供、若い世代や家族、こういうところに優先順位を少しシフトする、そういう考え方をわかって



上智大学法学部ゼミで、学生に囲まれて(平成12年)

らえると、総論だけではなくありますね。

女性の社会進出

丹羽 先生なんかは、まさに聡明な学生でいらっしやっただんでしょね。海外の生活で研究者として活躍されたり、大使も経験されている。日本にお帰りになっただけでいきなり閣僚にもなられた。若い時はどのような夢というか、将来、自分はこういう風になりたいとお考えになっていらっしやっただけですか。今、絵に描いたような大変素晴らしい人生を歩んでいらっしやるけれども……。

猪口 いえ、そんなことはないですよ。私は、日本が独立したその直後、平和と民主主義の中で生まれました。両親は男の子であつたら「国」という字を付けようと思つていたみたいなんです、女の子なので、やわらかい「邦」の方で。当時、親の世代はみんな国家のことを考えていた。子供を育てる中で、そういう夢を親が抱けた時代だつたと思うんですね。

つまり、この国は民主主義国家として再出発して、深い平和を目指す国へと発展すると。親がまずその希望を持つことが、そこに育つ子供にも希望を与える。当時は、親は大変であっても、子供の世代はどんどん

良くなると思っていいたんじゃないでしょうか。

丹羽 先生ご自身、中学生とか女学生時代から、将来は学者になりたいという夢は抱いていらっしやうたんですか。

猪口 私の母は専業主婦です。ですから母は、外でやる仕事は大変だから何か家でやる仕事を望んでいるようでした。例えばピアノの先生であるとか。

丹羽 そういう風潮がありましたね。

猪口 そんな風に思いついながらも、さまざまな希望を持つことが許された最初の世代だったのかもしれないですね。当時、すでにロンドン大学に著名な女性の経済学者、ジョーン・ロビンソン教授がいることなどを父親が教えてくれ、「あっ、そういうこともあるんだ」と思いました。早い時期から文章を書くのが好きでしたので、書く仕事をしたいと思っていましたので、研究者の道というのはかなり早くから漠然とは思っていましたが、でも、女性が職業としてその道を生きるということが全く信じられていない時代だったんです。

丹羽 女性の社会進出が、徐々に果たせる時代に移っていく過渡期だったんでしょうね。

猪口 私が通ったのは私立の女子校でしたが、そこには生涯を女子教育のために捧げるといふ気迫の女性

の先生方がたくさんおられましたので、最初の職業婦人を、その教師の姿に見たということがあります。そういう中でいろいろな刺激を受けながら、たくさんの本を読んだり、たくさんのものを書いて中学生の時代を送りました。ごく自然に夢を追求して、追求する中できつと実現されてゆくものだという思いに代わって行ったんですね。

ちよつと上の世代が、学生紛争の世代なんです。私の世代はその下の世代ですので、上の世代が非常に強く行動するのを見て、そのことを一歩引いたところで見えていたんですね、高校時代。

輝く青春時代

丹羽 今、先生が学生紛争の時代だとおっしゃいましたが、私、まさに学生紛争の時代なんです。

猪口 そうだと思いました。

丹羽 それで、ちょうど学校に通っていた頃、柴田翔という芥川賞作家の『されどわれらが日々』という本が出て、それをみんなで回し読みするんですよ。

猪口 あゝ、素晴らしい。

丹羽 それを読みながら、学生時代、特別何になりたいとか、そういうものをあまり持たずに、まあ何と

なく楽しくやっていこう。そのときの仲間にも、今、幹事長をされていらっしゃる中川秀直先生であるとか……中川先生は私より一年上なんです。

猪口 河村先生も、確か慶應ですね。

丹羽 河村建夫先生は私と同年代。私は、彼が初めて県会議員選挙へ出た時に、ちょうど新婚旅行を兼ねて萩まで行ったりましたね。

猪口 うわーッ、なんと強い紐帯。

丹羽 そういうことで、もう本当に四十年近くお付き合ひさせていただいています。幹事長はね、奥様と大変仲良くキャンパスを歩いておられていたんですよ。今でもそんな姿や光景を思い出しますね。

猪口 素晴らしいお話ですね。

丹羽 楽しかったですよ。やはり若いということは素晴らしい。

猪口 ですから、その世代の先生方の物事への真剣な取り組み方、問題提起の仕方、それを女子高の学窓の深いところから見えてたんです。

丹羽 とにかく一生懸命だったですね。何事に対しても。

猪口 それを見ていて一端のことを論じる。それを学内新聞で執筆して論じたりしていた。そういう中で

ごく自然に見えないバリアが崩れて道が拓け、進んでもいいというような雰囲気は女性に対しても出てきたんです。

丹羽 私も学生運動に情熱を傾けていたけれども、そうやって時代は変革していくんでしょうね。

猪口 でも、その後が大変でしたよ。それは、まず留学する時。当時は一ドル三百六十円の時代ですから、奨学金に応募するのだけれど、女性はなかなかチャンスがないとも言われていて、何百倍もの試験を何とかクリアして留学しました。今度は帰る時に指導教授から、「帰ったら職業はない。あなたは無職だ。アメリカに残れば助教の道が開ける。どっちが合理的選択か考えてごらん」と指摘されました。私は自分が生まれた国をどこかで信じようと、そのとき漠然とですけども思ったんです。それで職業の当てはないけれども帰って来た。案の定、教授の予測が正しく、しばらくは無職でした。それは先が見えないので、非常に長いように思いましたけど、半年だけでした。

丹羽 これだけ優秀な方を放っておくはずはないでしょう。信じた甲斐があったんじゃないですか。

猪口 お蔭さまで、上智大学で助手、専任講師、助教授、教授、学科長となったんですが、いずれも女性

で初めてでした。

丹羽 苦労されたこともあったでしょう。

猪口 苦労には慣れていきました。専門は国際政治学ですが、使命感と喜びを支えに乗り越えていきました。

丹羽 今は当時とだいぶ変わったんじゃないですか。

猪口 ええ、私が法学部で教え始めた当時は、女子学生は五割ぐらいでしたが、それから二十年ぐらい経つと五割になりました。ですから、やはり続けることが大事だと。

丹羽 「継続は力なり」って言葉もありますね。けれど、考え方によっては、その道を継続していけるだけの実力と運に恵まれていたんじゃないでしょうか。続けたくても続けられない場合も少なくありませんから。

猪口 そうですね。昔は、女子は就職難。今は継続難で七割の女性が第一子の出産と共に退職届けを出しているのが現状です。私が初期に教えた女子学生は、優れた能力を持っているにも拘らず、ほとんど、結局は学問を後にしました。一度離れてしまうと、なかなか戻ることは難しい。しかし、一度退職して子育て期間があったとしても、またスムーズに職場復帰できるようにしたい。仕事を辞めずに何とか続けたい方は、

育児休業が取れたり事業所内保育施設を設けて、続けることができるような環境を整えたいというのが、担当大臣になった時の私の大きな願いだったんです。

丹羽 猪口先生は、実際にいろいろ経験されて、それを乗り越えていらっしやう。いろいろ目の当たりにはされたでしょう。

猪口 私の時代には「政治というのは男のことですよ、なんであなた、政治学なんか女性なのにやりたいんだ」というような質問を常に受けました。先程、総務会長が男性中心の社会と、そういうことをパッとおっしゃってくださいましたが、おやさしいですよ。社会的な平等が広がって、いろいろな分野を志すのに、「なぜあなた、そんなことするの」という質問にいちいち答えなくても済む日が一日も早く訪れるようになって欲しいと思っています。

今年の課題と抱負

丹羽 大変失礼かもしれませんが、先生のお話なり行動を見ると、大変重いというか、信念が非常に強い。その信念を貫くという、その強いお気持ちがおそらく今日の猪口邦子先生を生んでいる。で、まさに夢を全部実現されて来られたんでしょう。

今年、我々はどのような風に、国民の皆さん方に夢を与えたいか、一番の課題だと思うんですけども、これについてどうですか。

猪口 二〇〇八年にはG8サミットを東京で行う予定になっておりますので、今年二〇〇七年はその準備の年となります。世界に対しての大きな役割と、希望を与えている国だということを、私はみなさんに感じて欲しいと思っています。

私が軍縮大使をしていた時、途上国の大使たちが日本の大使だとわかると、必ず声を掛けてくれるぐらいに、日本の大使は人気があったんです。特に途上国の大使からは、よく「あなたの国は希望の国だ」と言われました。日本の中にとるとそういう実感がなかなか湧かないかもしれないけれども……。

どうしてかと聞くと、資源もない国なのに見事に発展した。そして、大国であるアメリカと上手にやりながら、日本に行ってみれば、これは確実に日本社会であって、他のどの国の社会でもない。自分を構成するものについて確実な持続性を持っている。日本の文化、人間関係の結び方、いろいろな面でそこは日本なんだということがわかる国をつくっていると。世界から見れば、そういう素晴らしい国に私達は生きています。

丹羽 私は、先程ちょっとお話し申し上げたように、学園紛争があって、キャンパス内では、いわゆる反米、ベトナムに平和を！という立て看板が立ち並んでいた時代なんです。

猪口 そうですね。

Liberty Net

自由民主党ホームページ

インターネット

自民党総裁のメッセージや所属国会議員のプロフィール、国会の動きなど最新の情報をお届けします。ぜひアクセスしてみてください。

インターネット・アドレス

<http://www.jimin.jp/>

自由民主党
マルチメディア局

東京都千代田区永田町1-11-23
〒100-8910 ☎03-3581-6211(大代表)

丹羽 いわゆる「ベ平連世代」と言われる一人なんです。それで昨年の五月の連休に、ベトナムの民情を見ようと、誰にも会わないように一人で行って参りました。

ベトナムという国は人口が八千万人なのに対して、オートバイの数はなんと一千万台なんです。ハノイ、ホー・チミンをずっと見てきて目にしたのが、雲霞の如く走るオートバイ。女性の方もみんなオートバイ。姿勢がきちっとして腰を伸ばして乗っている。その姿を見て、今、先生がおっしゃったように、ベトナムの方々が非常に勤勉で、将来に対する夢と希望を持っているんだということが、ひしひしと伝わってきました。

総理自身も、二〇〇六年APECでハノイへいらっしゃっていろいろ見てきたようですけれども、そういう活気が凄く伝わったと思いますよ。

そういう意味で、私共の国とは比べようがありませんが、やっぱり将来に向けて夢と希望を、我が国の国民にも持たせなくちゃいけない、ということを感じました。

猪口 国民が希望を抱けるような国づくりを、次の世代が引き継いで担っていただけるように、政治家として

はよく考えなければならぬでしょうね。

丹羽 先程も話に出ましたが、景気回復における果実を国民全体に幅広く行き渡るよう、格差を是正して社会の安定に繋げていく必要もあるでしょう。

それに最近、いじめであるとか、非常に殺伐とした事件が相次いでいますから、やはり国民にもっとゆとりのある社会というか、生活というか、そういうものをつくるように、私達はもっと努力をしていかなければならないと、非常に抽象的なんですけれども思っています。

猪口 「日本に生まれて良かった」と思えるような社会を築けるよう、私自身も精一杯努力して参ります。それでは、最後となりましたが、総務会長としてのお立場から、今年の抱負をお願いします。

丹羽 今年は統一地方選挙と参議院選挙ですから、この国の安定の為に、私ども自由民主党が、国民の皆さん方の圧倒的なご支持を得るように、みんなで努力していかなくちゃならないと思っております。私も党の執行部の一人として、国民の理解が得られるよう努力を惜しまないつもりです。

猪口 党にとっても、総務会長におかれても良い年となるよう祈念しております。